【講演記録】

小岩井先生との思い出

《講演1》　愛知大学文学部文学科（昭和 33 年）卒、元東邦高校教諭　可児 光治
《講演2》　愛知大学法経学部経済学科（昭和 37 年）卒、松本革新懇代表世話人
松本市歴史の里あゆみの会（ガイドボランティア）　祖父江 哲一
《講演3》　愛知大学法経学部経済学科（昭和 31 年）卒
元トーワ物産株式会社取締役名古屋事業所長　熊谷 達三

（2015 年 10 月 4 日　松本市美術館）

《講演1》

可児　さっそく本題に入りたいと思います。私、小岩井先生に大変にお世話になった者の一人です。簡単な自己紹介その他お配りしてありますが、書いてあるところについては省略させていただきまして、さっそくなぜ私が愛知大学に入学したのか、どういうことで小岩井先生と知り合ったのかということ、ここに書かれてないことを、ちょっと話させていただきます。

私が高校 2 年生、昭和 52（1977）年の頃ですね。大林（晃）先生からハガキがきました。私の兄が百瀬文雄といいまして、まだ当時、大学院の学生だったんですけど、「一度自宅のほうに来てほしい」と。私がそのハガキを東京のほうへ転送しまして、兄が夏休みに帰るときに豊橋を回り、大林先生にお会いして、9 月から愛大の英語の講師をやると決まったわけですが、なぜその大林先生と私の兄なのかといいますと、兄が松本高校、旧制の松本高校ですが、大林先生が英語の先生だったんです。大林先生の三男の方だというふうに聞いておりますが、兄と非常に親しくて正月なんか遊びに来まして一緒にトランプなんかして遊んだりした思い出もありますが、この方は松高に在学中にお亡くなりになりました。ご病気で。そんなことで愛大のお世話に兄がなることになったわけですが、どうもその大林先生と私の兄は師弟というだけじゃなくて、東大の英文科の先輩と後輩ということにもあたるみたいで、そんなことで私も大林先生のところへ挨拶に伺ったりもしましたが、そういうことで私も愛大に行くということになったんです。実を申しますと愛知大学という学校の名前さえ知りませんでした。詳しいことは省きますが、兄が大林先生にお会いした時に、おそらく小岩井先生ともお会いして、小岩井先生との関係ができたのだと思います。兄が松本一中でしたので、それで小岩井先生と先輩、後輩という間柄だと。まして同郷でもある。そういうようなことから、私が愛大に入りました時に保証人になっていただい

たということになるわけです。それで保証人になっていただいたというようなことから、小岩井先生との付き合いが始まったわけですが、実はここにも書いておりますが、愛大に入った秋に母の従兄の所へ養子に欲しいって話がありまして。子どもにとって母親というのはやっぱり絶対的な存在だなと思うんですが、頼まれたらやっぱり断れなかったですね。何も変わりはなかったですけども。今なら断るじゃないのかなと思いますけども。それで養子をしましたら、養子先が、新潟県の、今は上越市ですけども、高田市だったんですね。小岩井先生の多嘉子夫人は高田の女学校の卒業です。私の養母が小岩井先生の奥さんの後輩だっていうことが分かったんです。そういうようなことから、どうも奥さんに大変目をかけていただけました。例えば 4 番目に書いておきましたが、公館での餃子パーティーっていうのは 4、5 回だったんじゃないかと思うですが、誰からか、明日とか今日、また餃子パーティー、(パーティーとは言ってはなかったと思うですが)、公館で餃子を作って、そして皆で食べる。私の印象では男子って僕一人だけだったんではないかなという気がするんですが、愛大の女生徒や、一般の方、比較的若い方が多かったですが、せいぜい 5、6 人ぐらいじゃなかったかなと思うんですけれども。餃子の作り方を教えてもらって、私は包み方が大変下手でしたけれど、未だにそうですけれども。それでも餃子っていうものを初めてそこでご馳走になったり、そういうふうなことがありました。実はこの餃子パーティーと私が勝手につけたわけですが、この時の小岩井先生の思い出で一番鮮明なのは、私らが餃子を作っておる。その隣の部屋で小岩井先生がこんな小さな火鉢なんですが、これを抱えて、これ火にあたるわけじゃない。灰皿なんです。灰皿代わりなんです。ピースというタバコ、これを美味しそうにふかしながらもの凄くくつろいだ様子で、たぶん和服だったと思うんですが、くつろいだ雰囲気でニコニコして私たちのところを見ている。この時の印象が私、本当にその時の何か写真を撮ってそのまま映像が私の脳裏に存在しているみたいな不思議な感覚があるんですけども。非常に鮮明に、穏やかな、非常に和やかな小岩井先生の印象がある。私の印象の中で一番強い一コマなんです。

3 番目のほうに、親友の羽山武光君。彼は自分で授業料を稼いでいたということで一年遅れて入学したわけですが、その彼を、多分小岩井先生に紹介するっていうふうな感じで公館に一緒に行ったんじゃないかなと思うですが。その時に雑談の中で高校時代の校歌ですね。一中の校歌、私どもの二中の校歌。君たちの校歌どんなやつだと言うので、二人でちょっと口ずさんだんですね。そしたら、それを聞いて先生が一中の校歌のほうがいいなとか言われましたけれども。私どもの高校の校歌は、実はかの有名な『ふるさと』の作詞者高野辰之氏です。あの方は、実は松本市内、長野県内の小学校から中学校、高校の校歌頼まれていっぱい作っているんです。そういうことをだいぶ後になってから知りました。在学中は全く知りませんでした。大変失礼な話だったと思うんですけれども。そんな思い出があります。豊橋駅頭へ先生を出迎えたっていうのは、先生がアジア・アフリカ法律家会議というのがありまして、その団長として出向いとるわけですね。何日間ぐらいでしょうか。11 月ぐらいから次の年またいで、だから何ヶ月かと思うですけれども。豊橋駅に何時ごろお帰りになられるということを知りまして、出迎えに行きました。先生が元気に何人かの皆さんと改札口を出られる。見えられた時の姿も私の脳裏に非常にこう鮮明に残っとるわけですが。もちろん何百人も出迎えていますので言葉も交わしませんでしたけれども。非常に懐かしい思い出としては私の中にしっかりと留まっております。

それから 6 番ですが、実は東邦高校という学校があるということさえ愛知県におりなが

ら当時は知りませんでした。多分 4 年生で、来年就職というあたりで、奥さんとはちょいちょい気安くお話をさせていただく関係でしたので、どっか高校の教員でもっていうような話をしたんだろうと思いますけれども。60 年近い前の話ですので、あまりその辺詳しく覚えてないんですが。小岩井先生に大変尽力いただいて、東邦高校に入れたわけです。小岩井先生と東邦高校、愛大と東邦高校って何か関係あるのかと。ご存知の方多いかと思いますが、車道に愛大が進出するって言いますか、名古屋へ校舎を作っていくという過程で東邦高校の教室を一時授業で使わせてもらったという、そういうことがあるわけです。そういう関係の折衝というのはおそらく小岩井先生と東邦高校の当時の理事長、下出貞雄っていう方なんですが、そんな関係で下出貞雄さんという方も名古屋の教育委員なんかもやられた非常に進歩的な考え方の持ち主で、東邦高校の学風っていうのが非常に民主的な、私たち教員ももの凄くやりやすい学校であったわけです。おそらく小岩井先生とそういうふうな面で相通ずるものがあったんではないかなと思うんです。おそらく奥さんを通じて先生にお願いをしていただいて、下出理事長との話の中で私はとっていただいたんだろうというふうに思っております。幸か不幸か生徒数が増えてくる。そういう状況があったみたいでなんと私と一緒に 15、6 人教員が採用されていますので、そういう点でラッキーであったんだろうなというふうに思っておりますが、大変お世話になりました。

実は小岩井先生がそんな偉大な方だなんてことはほんとに知りませんで、先生の人柄なり少しずつ今もまだまだどれぐらい理解できておるのか、半分も理解できてないんじゃないかなという気がしておりますけれども。とにかくまだ 24、5 歳までの私はほんとに世間知らずの若造でございまして、先生にお世話になりながら報いることのないままに過ごしておったとほんとに恥ずかしく思うんですけれども。奥さんとの会話の中で多分 7 番の媒酌人の話ですけども。私が結婚するについては媒酌人をというような話を、これも実は私あんまり覚えてはないんです。どこでどんな話でこんなことになっていたのかというのは。そういうふうな話になっておりましたけれども、その翌年先生ご病気で亡くなられたということで実現はしなかったわけですけれども。私は今考えると身の程知らずな、厚かましいことをよくもお願いしたもんだと、穴があったら入りたいと言いますか、そういう心境でむしろそんなご迷惑をお掛けしなくってよかったんじゃないかしらんという、そういう気が今はしております。あんまり時間がいただけないという話でしたので、こういうレジュメともいえない物、用意したわけです。藤田先生のほうから「小岩井先生からどんな影響受けたのか」、そういうふうなことを問われる手紙をいただきまして、色々実は振り返りながら考えておったんですね。このレジュメは小岩井先生の大学葬のところまでで当初はやめるつもりでおったんです。ところが今日の日が近づいてきまして私は今こんなことをしておるということをここの下に書かせていただいたわけですが、実はこれは私が本間先生、小岩井先生をはじめ愛知大学でお世話になった先生方、あるいは 4 年間で私と交流をしていただいた同級生、諸先輩の方々の影響から私が現在こういうようなことをしているんじゃないかなと。私は気づいておりませんでしたけれども、小岩井先生からの私の受けた最大の影響ということではないでしょうか。そういうことで書かせていただきました。

実はここに書いてあるようなことを現在やっておるわけですが、この資料の裏にある写真、名古屋市の公会堂で毎年 8 月「平和のための戦争展」っていうのが行われるわけですが、私が国賠同盟と省略しておりますが「治安維持法の犠牲者の方に国が保障すべきだ」という、そういう会の県の常任理事ということをやっておりますが、その展示の中に実物

大のその当時のポスターが貼ってあったんです。それでこれは貴重なものだと思いまして写真に撮った。私が写真に撮らせていただいたものですので小岩井先生との思い出っていうことで今日こういうかたちで皆さんにもお見せしたわけです。これは年代ちょっと忘れましたけど、愛媛から立候補した時の選挙演説のポスターですね。昭和３年ぐらいですね。先生は関西で、社会で下積みの方々のために活動されて東の布施辰治、西の小岩井浄というふうに言われておったというのを新聞で読んだ記憶があるんですけども。私はそういう先生の偉大さを知らずに学生時代散々お世話になって、先生の足元にも全く及びませんけれども愛知大学の卒業生として、これからも体力が続く限り色々な面で努力をしていきたいなというふうに思っております。つたない話ですみませんでした。これで終わらせていただきます。

2015.10.4
松本講演会
於松本市美術館

小岩井浄先生との思い出
―東亜同文書院から愛知大学へ―

自己紹介　可児　光治（旧姓　百瀬）

1936 年　東筑摩郡笹賀村（現松本市）の農家に、
9 人兄弟・姉妹の三男として誕生
1951 年　松本県ケ丘高校（旧第二中学校）
1954 年　愛知大学入学

愛知大学入学への経緯

1953 年 9 月から次兄　百瀬文雄　愛知大学の講師に
大林晃先生と兄文雄の関係　1954 年 4 月から専任講師に

小岩井先生と私

1. 保証人に
2. 多嘉子夫人と私
3. 親友　羽山武光君と公館で
4. 公館での餃子パーティ
5. 1957 年　豊橋駅頭へ出迎え
6. 1958 年　東邦高校へ就職　愛知大学と東邦高校
7. 媒酌人をお願い

1959 年 2 月 19 日　小岩井先生逝去
2 月 26 日　愛知大学葬

補　足　国民救援会尾北支部委員（10 年目）
治安維持法犠牲者国家賠償要求同盟愛知県常任理事（3 年目）
憲法九条の会会員・同平和のうたごえ合唱団団員（9 年目）
日本年金者組合岩倉支部長・書記長・副支部長・岩倉年金倶楽部編集長歴任
岩倉のうたごえ「皆んなで楽しく歌う会代表」（5 年目）

蛇　足　1991　平成 3 年　第 73 回全国高校野球選手権　甲子園大会
1992　平成 4 年　第 74 回全国高校野球選手権　甲子園大会
阪口慶三監督と部長としてベンチ入り計 5 回
現在東邦高校硬式野球部後援会顧問

講演の際に配布された可児光治氏レジメ

《講演2》

祖父江　皆さん、こんにちは、ご紹介いただきました祖父江でございます。よろしくお願い致します。

私は小岩井先生のお人柄をどうかと言う前に、私がご紹介いただきましたように、愛知県名古屋の出身でございます。長野県に住んでみて愛知県にない県民性を見つけることが出来るのです。それはどうしてかと言いますと、今私は松本市の野外博物館歴史の里でそこに保存されている旧長野地方裁判所の建物、自由民権運動で活躍した木下尚江の生家、製糸工場で働きに行く過程の宿泊所の建物が移築されています。そしてそれにかかわりの人々の生きざまを解説しています。

よく長野県は『教育県である』と言われます。県民の中には『理窟ぽい』と言われています。もう少し詳しく見てみますと大変失礼ですが教育者がいろいろ総合教育したとは思わないのです。それは来年 330 年を迎える百姓一揆がこの地方に起こったのです。騒動を起こした庄屋多田加助や農民、当時一万人が松本城の藩主に年貢を下げろと訴えるのです。お城が傾くと言われたぐらいです。

長野県は百姓一揆が全国一闘われたところです。鎌倉時代でも、これから始まる真田丸が描かれてきますが、上田地方では学問を志す多くの若者が集まり勉強しました。10 代ごろ学んだこの地を『信州の学海』と呼んでいたのです。明治の時代でも寺子屋の数が全国一存在していましたし、明治の自由民権運動においてもその広がりは全国にも大きな影響をもたらしたのです。近代になっても公民館の数も全国一存在し、働く女性の就業率も全国一と言われていました。人々が寄り合って話し会い、協同しあって連帯の絆を構築してゆく風土、土壌が存在しているのです。話し合ってゆく過程には，ものの捉え方、考え方、見方が育っていくのは当然だと思うのです。長野県は農業県ですが製糸が盛んでいわゆるお蚕さんで生計を立てていましたのでそれなりに生活が出来ていたのです。ですから長男は後を継ぎ、次男、三男は学校に行く勉強していく機会を得て行くのです。一概に教育県、理屈ぽいと言う捉え方で片づけられない問題と思います。こう言う面からとらえますと長野県はとても勤勉性、革新的、進歩的と言うものが育っているのです。突然現れたものではないと思います。このことは私が住んでいた愛知県には存在しないと思いますし、歴史上の文化を引き継ぐ長野県の特性としてとても素晴らしい県だと言えると思います。

こういう中で、先ほど講演された小松芳郎先生のお話の中に、お父様は自由民権運動に関わられ、小岩井先生も自由民権運動大正デモクラシーと言う一つの過程のなかで存在しているとあったことはとても大きな意味のあることです。アメリカに渡られたお父様とは過ごされた期間はわずかですが、お父様も含めて自由民権運動などによって形成された長野県の特性は、小岩井先生にとって決して終わりではなく前史でもなく、脈々と生きていることが先生のその後のご活躍から学ぶことができるのです。

私は愛知大学に入りまして 4 年間も自治会の委員長をしてきました。要するに学生運動をいたしました。その当時は社会情勢も大きく変化して課題も多い時代でした。それは何故かと申しますと 1960 年前後ですから、1959 年は勤評、60 年警職法、安保と言う政治課題、労働運動では三井三池、王子製紙の闘い、一方民主主義を守る闘いの松川事件そして学園での授業料値上げの問題、学園の民主化運動、更に伊勢湾台風救援活動など本当にあらゆる分野の国民的な闘いと活動が目白押しの中で大学に通っていました。

この学生運動を通して沢山の事を学ぶことが出来たと思います。それは将来の自身の生

き方を学ぶ機会になったのです。このようなあらゆる闘いの営みの中での思想形成です。お互いに意見の違いは存在しますが一致したことでは手を取り合うことです。意見の違いがあっても排他論理はしない、お互いに違いを認め合う事でした。小岩井先生とは直接講義を受けたことはありません。授業料の値上げ、学園の民主化の課題で団体交渉を豊橋校舎に出向いてお会いするのです。

当時の学生運動では課題は一緒に取り組んでいますが、その課題の捉え方、運動の進め方では大きな隔たりがありました。豊橋校舎の昼間部の自治会の方針戦術も名古屋校舎の自治会の方針戦術は違いがあり、全学連の方針にも違いがありました．あの樺美智子さんが亡くなる際の国会突入の方針も私は支持しませんでした。豊橋校舎の正門のバリケートで抵抗を示す方針も支持しませんでした。そういう首謀者の下での学生運動は学生にとっても、学園にとっても不幸を呼ぶという事で 4 年間自治会活動を続けたのです。小岩井学長のとの交渉も権力者との闘いに挑む彼らの交渉です。でも小岩井学長はよく学生の声に耳を傾けていられました。卑劣な言葉を浴びせる学生に対して我慢されていられたのか、よく聞かれていました。今日事務局の方がいられますが、当時の事務局は官僚的で、ガミガミと言われ話し合いにならないことがありました。学生から挑発的な行為がありましたが、私は人間同士の話し合いはお互いの意見に充分聴くことが大事であることを主張してきました。小岩井先生とはなかなかお会い出来ませんでしたが、お会いした際は名古屋校舎の様子を聞かれました。「何かあれば学生部長に伝えておいて」と言われたことは印象深いです。学生部長が名古屋校舎の授業がある時は必ず自治会室に寄られていました。

先ほど小岩井学長の葬儀に弔辞を読まれた南原先生のお話が出ましたが、実は私も小岩井学長へ弔辞を捧げました。私が弔辞を読みました時の記事は中日新聞に記載されましたが、弔辞がその後どうなったかは知る余地もありません。学生時代には授業も受けました 8 代目の学長された細迫朝夫先生が松本にお出でになり、地元の新聞に小岩井浄伝を書かれた前県短学長の上条宏之先生のお宅に寄り、その後小岩井先生の生家に訪れたのです。なんと当時の葬儀の弔辞が存在していたのです。南原先生、小幡先生そして私の弔辞も残っていたのです。今回この展示会・講演会で見ていただこうと思いましたが、今回見当たらなく残念でした。当時お別れに告げました言葉は愛知大学の建学の精神でした。この学びはとても私の脳裏に刻み込まれていました。そして人間を大事にしていくことを教えられたことを伝えてお別れの言葉としたのです。

その後、日本の戦後史を語る上で総括しても総括できない、1960 年の闘いの営みが起こりました。それが現在から見てみますと小岩井先生の歩んで来られた道のりは、当時は勿論のこと、大阪時代での弁護士としてのご活躍、そして労農同盟の統一戦線形成の営みも決して前史の出来事ではないことをつくづく思うのです。『愛知大学を創った男たち』（加藤勝美氏著）という書籍や、藤城和美先生の書かれた『小岩井浄と人民戦線』の論文を読ませていただくと、その影響の大きさは計り知れないものがあります。

実は長野県に農民、労働者、教員、医療、消費者などで組織された団体があります。その組織の名前は『食糧と健康を守る長野県各界連絡会』という名称で通称『食健連』と言っています。1985 年に準備して 1986 年に発足しました。全国で初めてできた組織です。米の自由化反対、日本の食糧は日本の大地からというスローガンを掲げて運動を起こしました。30 年前です。現在、全国 44 都道府県で組織されています。その命名は私なのですが、うぬぼれて申し上げているのではないのです。

小岩井学長の葬儀（祖父江哲一氏提供写真）

まさに各階層から組織されたもので、小岩井先生の大阪で活躍されたことは振り返ってみますと大きな教えを頂いていると思うのです。

小岩井先生と歩んで来られた細迫先生、そして国際政治学として小岩井先生と度々講演にご一緒された鈴木正四先生、お二人は小岩井浄展を描こうとされたのですがそれが出来ないままでした。残念です。

私は素晴らしい先生に出会い、教えを受けたのです。私が小岩井学長の弔辞を述べたことはお話しましたが、細迫先生、鈴木先生のお別れの言葉、弔辞も述べているのです。今ここにいろいろ活動出来ますのも素晴らしい先生の教えの指針があってこそだと思います。そして愛知大学の建学の精神が脈々と伝わっていると思います。

今日の情勢を見た時、憲法学者でもあり、弁護士でもあります小岩井先生がここにいられたならば、「この戦争法案は憲法違反であり、廃案にしなければならない、安倍さんおやめなさい」と呼びかけられるでしょう。その事をお伝えして私の話は終わりたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

《講演3》

熊谷　私は只今ご紹介いただきました熊谷達三でございます。東筑摩郡洗馬（せば）村の出身です。現在の塩尻市洗馬であります。小岩井さんも同じ東筑摩郡というようなことでございます。

昭和 21（1946）年に松本中学校入学、旧制中学の最後でございました。4 年間も後輩なしでした。27 年に松本深志高校卒、それから 31 年に愛知大学卒となります。山崎製パン株式会社を定年後、同社関連のトーワ物産株式会社取締役名古屋事業所長を 76 歳まで在任しました。専門は経営経理でした。

愛知大学に行きましたのは、私は高校の時、世界史の授業を小岩井さんの甥にあたります藤澤宗平先生に教わりました。それから愛知大学を卒業して、昭和 26 年に、小岩井さん

2015 年 10 月 4 日
於松本市美術館

「小岩井先生の思い出」

自己紹介　熊谷達三

長野県東筑摩郡洗馬村（現塩尻市）出身
S21 年　松本中学入学
S27 年　松本深志高校卒
S31 年　愛知大学卒
山崎製パン（株）定年後、同社関連のトーワ物産（株）取締役名古屋事業所長
（退任 76 歳）

1. 松本中学伝説の相談会長　その人が小岩井先生であることを高校生になってから知る

2. 小岩井先生との出会い

S27 年秋　先生の書斎整理のお手伝い
先生からの薫陶　ご家族との会話

3. 先生への思い出の数々（エピソード）

・愛知大学「設立趣意書」の感銘
・本間前学長との深い盟友関係への敬意
・愛知大学が会場となった「中国学会」、閉会時の学生たちへのねぎらい
・大学葬における著名人たちの弔辞
　政治学会理事長南原繁（東大総長）の格調高い弔辞に感動
・典型的な民主主義者　寛容の心を秘めた人　学生への深い愛情の人

4. 早すぎた死を惜しんで

講演の際に配布された熊谷達三氏レジメ

の紹介で松本深志の教職にやってこられた宮崎文郷さんという先生がおりまして、この先生から、「いやぁ、小岩井さんて人は大変な人物だ。この人のところでだったら君にはふさわしいじゃないかな」というようなお勧めがあったりして、それで愛大へ入学したようなわけでございます。

小岩井さんをどうして知ったかということになりますと、松本中学の 1 年生に入ってから、松本の源池というところに、初代校長小林有也先生のお墓があり、その墓参に学校全体で行くんですね。6 月 9 日の命日の日に毎年行っていて。その時にですね、伝説の相談会長がいたんだというような話を中学 1 年生の頃に聞きました。それがどういう人かというのはその時は分からなかったんですが、高校生になってからその人が小岩井浄という人だということを知ったわけでございます。それが小岩井さんを知った始まりでした。この小林有也校長、それから後任の本荘太一郎校長が着任。小林校長という人は非常に人格の高い人で、生徒から大変敬愛されていました。そして自治の精神という校風を育てました。小岩井さんはその自治の生徒組織である相談会長だったのです。新しく台湾総督府から来

た本荘校長と意見の衝突があり、毅然として退学をした。そのことについては先ほど小松芳郎先生から説明をしていただきましたので、私の説明は省きますけれども、まあそういうことであったと思います。それで私は愛知大学に行ってからですね、小岩井さんに直接退学の時の色んな経緯を尋ねたんです。先生はお話してくれました。それはもう生き証人のようなことのお話でした。本荘校長は、新しく校友会を作り、自ら校長が会長となり、生徒自治の相談会、矯風会を弱体化しようとする。本荘校長の独断専行のようなそういう学校運営の在り方、そういうことに激しく衝突をしたと。そして、本荘校長は「君はその両方の、相談会と矯風会と両方の会長をやれ」と言う。今までの生徒自治を否定するような発言。それに対して、「それはできません」と言ったら、「それができないのだったらおまえ学校を辞めろ」と、「辞めます」と。きっぱりと辞めたというようなお話でございました。それは小松芳郎先生がお話された通りのことでした。まあその通りのお話をね、小岩井さんから私、直にお聞きしましてですね、大変な生き証人のお話だというふうに承っておったわけでございます。私が思うにですね、その頃から小岩井さんという人は、大変この不屈な精神というか、不条理なことに対してですね、立ち向かっていく、そういう精神が備わってきていたんではないかな。小岩井さんはそういう生き方を通してきたのではないかなあ。こういうふうに思っておるわけでございます。松本中学の生徒自治の伝統は、現在も松本深志高校に継承されているようです。

大学に入りましてすぐに先輩に連れられて小岩井さんをお尋ねしました。「先生、松本から来ました」と言ったら、「ああ、よく来たね」ということでございました。それから半年くらい経ってから、小岩井先生が私に、「お願いだけどね、熊谷君、書斎に新聞が大分溜まっちゃったんだ。書斎の整理をしたいからちょっとお手伝いをしてくれないか」というようなことでございました。それで、新聞の切り抜きを、先生の大体のご意向に沿うような切り抜きを随分たくさんやって整理をしたりしました。幾日かそういうことをやりましてですね、頻繁に小岩井さんから色々なお話を承りました。私は信州から来た山出しの素朴な若者でしたから、「君はそういう素朴な心を大事にして、文学の心を持つとよい」と。先生も、少年時代は文学に志を持ち、石川啄木などに心酔した時があったというようなお話をされました。それから当時ですね、中国が新中国になった頃の時期でしたが、朝鮮動乱についても、国際認識というものをみんなが養ってもらったほうがいいと。そういうことも色々とお話をされ、その時にそういうことに目覚めさせていただいたという思い出がございます。また、奥さんの多嘉子夫人が昼食を作ってくださって、一緒にいただきながら色々なお話をお聞きしました。婦人公論の記者としてソ満国境の婦人従軍記を書いたり、上海では、中国の非常に困っている底辺の女性の人々と一緒に中国婦女協進会というものを立ち上げて設立したこと。そして、中国のそういう底辺の女性達と生活を共にし、苦楽を共にした。誰も中国のそういう底辺の人達っていうのは、一度信頼すればとことん信用してくれると。疑ってくることはないというような、そういうお話も色々お聞きしました。それから、学長や学部長の住いで、東京などから来られる教授の先生達が宿泊される愛知大学公館が、GHQの指示により、米軍に接収されそうになる事がありました。その時、多嘉子夫人はマッカーサー夫人に手紙を書き、それが一助となり接収が解除されたというお話もされました。私は、夫人はイデオロギーにあまりとらわれない、実行力のある大変な方だと思いました。

愛知大学に入学してから非常に感銘したことは、愛知大学の「設立趣意書」という文書

でした。これは文部省に提出した、設立の手続き書類であります。この設立趣意書の趣旨が、気概のこもった非常に格調の高いものでございました。戦後日本の復興、新国家建設の指針はこれだと思いました。非常に感銘を受けたものでした。戦後の荒廃の中から旧来の軍国主義的傾向、侵略主義的な傾向とかそういうものを廃止し、一擲して、そして新しい日本を作る。文化道義平和を目指す民主主義の新国家を作っていかなければならないと、そういう為の教養ある有為の人材を養成し育成していかなければならない。まあそういうことから始まっていくんですけども、その文章が非常に格調が高いものであり、非常に感銘しました。今でも愛知大学には、大学の中央に石の碑が建っており、そこに抜粋が書き刻まれてあります。自由受難の鐘の下に。それを見ながら感慨深いものを覚えます。その文章が小岩井さんの起草によるものであるということを知り、なるほど、さすがだなあと思いました。本間学長が、「あれは小岩井さんが起草したんだよ」ということも言われまして、定説になっているわけです。大変感銘をした趣意書でございます。

本間前学長と小岩井先生との盟友関係ということについて、先ほど佐藤学長先生からのお話にもありましたように、上海の同文書院の時代から本間さんの懐刀といってもいいんじゃないかなと言われましたが、こんな話があります。昭和 28（1953）年頃の話ですが、豊橋の校舎に、夜間の短期大学部を設立するときの話です。こういう話がありました。これは小岩井さんが打ち出したことですけども、「勤労する社会人に学府の門扉をひらきたい」。まあこういう趣旨でした。それに対してですね、本間学長は、「それはいいことだ。若い教職の皆さんに講座を持ってもらい、待遇改善になる」と。当時、学長と小岩井さんとの信頼関係は、1+1＝2、2 の二乗以上の相乗効果があったのではないかと、そのへんに本間・小岩井の愛知大学の基礎を作るルーツがあったんではないかと、そういう盟友関係に非常に共鳴をし、敬意を表しておったわけでございます。いくつかこのようなお話はございますが、今日は時間の都合であまり話すことができません。

昭和 30（1955）年の秋ですけれど、愛知大学が会場となって中国学会が開催されました。新中国ができたばかりでしたから、小岩井さんも歓迎の意を込めて、中国との関係を良くしていくことがアジアの平和、世界平和に貢献をしていく礎石だと語り、戦後、不死鳥のように蘇る力で立ち上がったこの愛知大学で、この中国学会を迎えるということは、まことに感慨深いというような辞を述べられました。また、その学会が終わった後でも、学生達の協力に、「みなさんありがとう。本当に良くみなさん開催に協力してくれた。そして、皆さんの色彩的センスの良さには驚いたよ」と。深紅の赤や黄色、中国的カラーで、それで学内を彩り飾ったと。歓迎をしてくれたと。大変学生達をねぎらいました。これは当時、中国が新中国になったばかりですから、国旗を制定したばかり。中国の国旗は五星紅旗。深紅の地に大きいきれいな星が 1 つ。それから横に 4 つの星が並ぶ。ちなみに言いますと、大きい星というのは中国共産党。小さい星のいちばん上が民族資本、次が労働者、次が農民。いちばん下が知識階級というような毛沢東思想のあらわれだったと思います。そういうことはともかくとして、そういう色彩感覚についてですね学生達を非常に褒めてねぎらいました。

小岩井先生は亡くなられたのが非常に早すぎました。非常に残念でございました。昭和 34（1959）年の 2 月 19 日に亡くなられたわけでございますけども、26 日に愛知大学の大講堂で大学葬が執り行われました。その時に私も駆けつけて参列させていただきました。白いカーネーションの花を手向けてご霊前に祈ったことでございました。その時に全国の

著名な文化人、学者、政治家の方々がおいでになって、非常に格調の高い弔辞を皆さん読まれました。今でも記憶に残っているのは南原繁さん。南原繁さんは、先ほど小松芳郎さんからも言われましたけれども、元東大総長、政治学会理事長。小岩井さんは政治学会理事でしたけどもね。それから平野義太郎さん、この方は中国研究所の所長。社会党の細迫兼光さん、この方は戦前に関西で小岩井さんと一緒に盟友として活躍された方でいらっしゃる。それからあと、共産党からは春日庄次郎さん。そういう人たちがみんな来ましてね、弔辞を読まれました。私が最も感動したのは、南原繁さんの弔辞でした。先ほど小松芳郎さんからもお話になられたので詳しいことは省略いたしますが、非常に格調が高く、小岩井さんの一生への賛辞でございました。いまの政治学会での小岩井さんの学風と業績にも触れ、そして、君こそ典型的な民主主義者であったとの賛辞もあり、また、寛容の心を秘めた、さながら大人の風格を持っていたと。そして、世界平和を理想としていたということや、中国との善隣友好についても触れ、その功績を讃えました。南原さんの弔辞は非常に格調が高いものでした。そうして、声も大きいんです。式場の隅々まで伝わりました。そしてまた、春日庄次郎さんなんかは、戦前関西での活動や、昭和 10 年頃に出版された『冬を凌ぐ』という随筆集にも触れて、苦難の時代に切々と訴える君の眞情、そういう哀切のなかにある人間小岩井の人間性を語りました。小岩井さんには、そういう弔辞の多くの方々、22 人の方々が読まれましたが、その中に大体の小岩井さんの人間像というものが描き出されていると思いました。

ヒューマニストであり、南原さんが言われるように典型的な民主主義者だったんだなぁと思います。それに、非常に実務力のある実際家であったと。愛知大学を立ち上げる時なんかでも本間学長と共にですね、その実務面では相当な、さっきの趣意書もそうですけども、そういう理想と実務力のある実際家であったと思います。それに大変学生を愛しましたね。信望が厚く、慕う人が多かったと思います。しかし早すぎる死期を迎えました。いまの医療でしたら、乗り切られたんではないかと。もっともっと存命してほしかった。その年の二人のお子さんがまだ小学校 6 年生、4 年生でした。せめて成人するまでは存命していただきたかった。また日本のためにも、まだまだ尽くしていただきたかったと思います。色々思い出を語らせていただきました。謹んでご冥福をお祈りしたいと思います。